⑫ 公 開 特 許 公 報(A) 平3-159670

®Int. Cl. 5

識別記号

庁内整理番号

⑩公開 平成3年(1991)7月9日

A 63 C 17/10

7008-2C

審査請求 未請求 請求項の数 1 (全5頁)

60発明の名称 芝スキー

> ②特 願 平1-300014

四出 願 平1(1989)11月17日

. 渡 俊 東京都江東区亀戸6丁目31番1号 セイコー電子工業株式 仰発 明 者 邊

会社内

保 明 者 久 木 功 東京都江東区亀戸6丁目31番1号 セイコー電子工業株式 ⑫発

会补内

72発 明 野 広 東京都江東区亀戸6丁目31番1号 セイコー電子工業株式 池 重

会社内

顧 セイコー電子工業株式 東京都江東区亀戸6丁目31番1号 他出

会社

四代 理 人 弁理士 林 敬之助

最終頁に続く

1. 発明の名称

芝スキー

2. 特許請求の範囲

複数の無限軌道部による芝スキーで、前記無限 軌道部の少なくとも一つが芝スキーの接地面に対 し平行に回転する舵取無限軌道部である芝スキー において、ソールプレートが進行方向に対し平行 な軸を中心として左右に傾くことを特徴とする芝 スキー。

3. 発明の詳細な説明

(産業上の利用分野)

本発明は、芝スキーに関するものである。

(発明の概要)

片方の芝スキーに、ループ上につなげられたフ レームをレールとし、同様にループ状の帯に取り 付けられたローラー郎が回転運動をする無限軌道 郎が複数存在し、前記無限軌道部の少なくとも一 つが芝スキーの接地面に対し平行に回転する舵取 無限軌道部である芝スキーにおいて、ソールプレ - トが進行方向に対し平行な軸を中心として左右 に傾くことを特徴とする芝スキー。

〔従来の技術〕

従来の芝スキーにおいてソールプレートが進行 方向に対し平行な軸を中心として左右に傾くもの はなく、接地面とソールプレートは平行であった

(発明が解決しようとする課題)

舵取無限軌道部を持つ芝スキーにおいて舵取無 限軌道部の低面は接地面と平行な場合、舵取無限 軌道部の低面に垂直な軸に対して左右に回転し舵 の役目をする。しかし、ターンを行い舵取無限軌 道部の低面が地面に対し角度をもつ場合、舵取無 限軌道部の軸に対し左右に回転する舵取運動は制 限されてしまうためスムーズにターンができない と含う問題点があった。

(課題を解決するための手段)

芝スキーのソールプレートが進行方向に対し平

行な軸を中心として左右に傾くことができるようにした。このスキーを用いるとターン時にソールプレートが傾くため、舵取無限軌道部の低面は地面に対し角度を持たなくても良くなる。よって、舵取無限軌道部の低面は、如何なるターンにおいても地面と平行に保たれるため、舵取運動が制限されることなくスムーズにターンができるようになった。

(作用)

総取無限軌道部を持つ芝スキーにおいて舵取無限軌道部を持つ芝スキーにおいて舵取無限軌道部の低面は接地面と平行な場合、舵取無限の後間に垂直な軸に対して左右に回転し舵の役目をする。しかり、ターンを行い降合、舵軌道部の軸に対し左右に回転する舵取運動は、破されてしまうためスムーズにターンを行うと第2限されては、従来の芝スキーでターンを行うと第2の正面図に示すようにスキーの重か地面に対しの内側に傾くため、無限軌道部の低面が地面に対し図示りのような角度を持つためである。

ーラー館 6 とベルト 9 が回転することにより芝スキーは前進する。無限軌道部 1 は全長が 3 5 cmのものを 2 つ使用した。

無限軌道部1のうち後方のものは第5図の回転軸 13を中心に回転する舵取無限軌道部14である 。第5図は舵取無限軌道部14の軸回りを断面図 で示したものである。板状の部は5は、雪上のス キーと同等の強度をもつ会板を用い、その上部に 第 6 図に示すようにソールプレート2を取り付 けた。ソールプレート2はばね15で支えられて おり、スキーヤーが重心を傾けることにより進行 方向に対し平行なソールプレート2の回転軸16 を中心として左右に傾く構造になっている。第1 図は、本発明の芝スキーの動作を上から見た平面 図である。進行方向17に対し、(A)は、直進 時、 (B) は左ターン時、 (C) は右ターン時の 芝スキーの動作を示したものである。つまり、第 7 図の (B) の左ターンのとき、ソールプレート は左に傾き、(C)の右ターンのとき、ソールプ レートは右に傾く。これによりスキーヤーは、思 り、ターンをするには重心を内側に傾けなければ ならない、しかし、傾ければ舵取機能が制限され ターンができないと言う問題点がでてくる。

そこで本発明では、第3図に示す正面図のように無限軌道部を傾けずにソールプレートを図示 θ ' のように傾けることにより重心を傾ける機構を考 なした。

(実施例)

以下実施例により本発明を説明する。

- 実施例1-

第1図に本発明の無限軌道部を2つ有する芝スキーの斜視図を示す。構成は、2つの無限軌道部とでもがある。無限 軌道部と板状の部材5からなる。無限 軌道部と板状の部材5は、厚さ1.5mmのスフレンス 類型の固定部4を用い無限軌道部材に直接 ンレス3にポルトで、板状の部材5側は部材に直接 本ネジで取り付けた。無限軌道部の構造は、第4 図に示すようにフレーム3をローラ部6ののより で左右からはさみ、さらに上からカバー8により ベルト9をはさむもので、フレーム3の周辺をロ

い通りのターン孤を描くことができた。

- 実施例 2 -

実施例 1 と同様の構造で無限軌道部の全てを舵取無限軌道部 1 4 にしたものを作製した。第 8 図には、全てを舵取無限軌道部 1 4 としたときの芝スキーの動作を上から見た平面図である。進行方向 1 7 に対し、(A) は左クーン時、(B) は右ターン時の芝スキーの動作を示したものである。これによりスキーヤーは、特に低速でターン弧を思い過り描くことができた。

(発明の効果)

以上の実施例でも明らかなように本発明による と、低速から高速までターン弧を思い通り描くこ とができる芝スキーを提供することができる。

4. 図面の簡単な説明

第1図は、本発明の芝スキーの一実施例を示す 斜視図、第2図は、従来の芝スキーでターンを行 う場合を示す正面図、第3図は、本発明の芝スキ ーでターンを行う場合を示す正面図、第4図は、

特開平3-159670 (3)

無限軌道部を分解して示す料視図、第5図は、本 発明の芝スキーの舵取無限軌道部の回転軸回りの 断面図、第6図は、本発明の芝スキーの正面図、 第7、8図は、本発明の芝スキーの動作を示す平 面図である。

1 · · · 無限軌道部

2 · · · ソール・プレート

3 . . . 7 レーム

4・・・固定部

5・・・仮状の部材

6・・・ローラー部

7・・・つめ

9 . . . ベルト

10

11・・止めねじ

12・・軸受け

13 · · 回転軸

14 · · 舵取無限軌道部

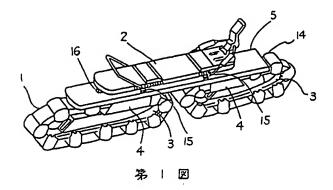
15·· 12/12

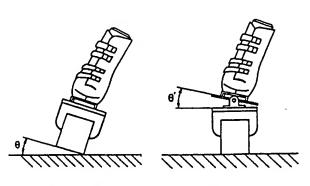
16・・ソールブレート回転軸

17・・進行方向

以上

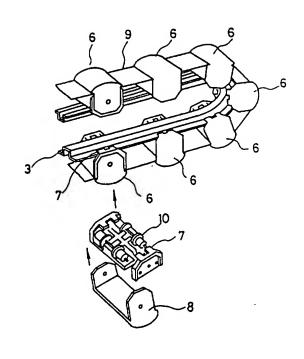
出願人 セイコー電子工業株式会社 代理人 弁理士 林 敬 之 助





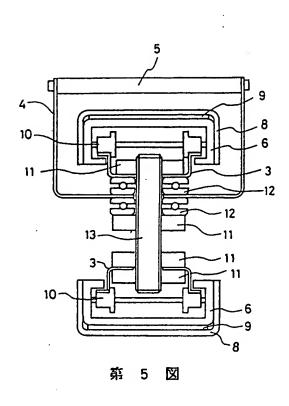
第 2 図

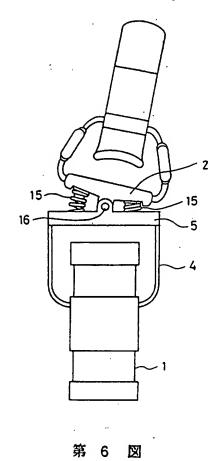
第 3 図

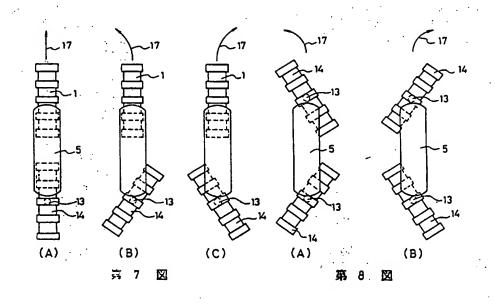


第 4 図

特開平3-159670 **(4)**







第1頁の続き								
⑫発	明	者	若	林		豊	東京都江東区龟戸6丁目31番1号 会社内	セイコー電子工業株式
個発	明	者	鈴	木	瑞	明	東京都江東区亀戸6丁目31番1号 会社内	セイコー電子工業株式
⑫発	明	者	大	門	孝	彰	東京都江東区亀戸6丁目31番1号 会社内	セイコー電子工業株式
@発	明	者	恒	見	雅	彦	東京都江東区亀戸6丁目31番1号 会社内	セイコー電子工業株式
@発	明	者	今	井	朋	子	東京都江東区亀戸6丁目31番1号 会社内	セイコー電子工業株式